し、ハトポッポ時計もかけてあるので、かわいい鳩が出て来る時刻には、時計の前に集ってポッポーと鳩が出て鳴くのを待って喜こんでいる。

この「こどもの　いえ」では、教師の支配も、大人の気分の圧迫もなく、幼児同志で、また自分で、それぞれ欲求する物や事にふれて、自分の心を働かせてたのしく暮らしているから、教師は遠くから見まもって、この雰囲気を破壊しないように留意しながら、よい相手役をつとめている。この家がこれ程までに幼児たちから歓迎され、喜ばれるとは実に予想以上である。この家へはいるのを待ち遠しがりまたはいったら出たくないと少しでも長くこの家にいたいと希望する。(園児が多いので交代してはいるからである) この家の構造も壁の色も、室内の塗ってあるペンキの色彩も設備してあるものも、ものいわぬ環境が、子どもを呼んでいる。明るくて、静かで、美しい室の中には、欲求を満足させてくれるものが、いろいろあって、しかも束縛なしに、持って遊べるので、活動がつぎつぎとつづくとともに、よい経験に伴ってよい学習をしていることは、自然の間に生む教育効果と施設・設備という環境について大なる関心をいだいている。

幼児嘶実演回顧記

(前略)　　平安短大保一B　A子

子どもにお嘶をしているときは、何もかも忘れてしまう。子どもたちは、お嘶をしている私に、一刻のすき(本人傍点)をも与えることを許さないから、忘れなければならなくなるのである。

近頃の私は、だれと話し合っているよりも、子どもと話し合っているときが一番幸福なのである。(大意抄記「回顧」の題意に適格例)

〔鑽〕すきを充たす一心が、彼我一体に結ぶお嘶の「場」である。

幼稚園の朝の新味と、保母の慰労に満足する純情交感の場と、倉橋先師の「自由感」がここに躍動している。

「幼稚園真諦」32頁「茶人の悠々たる生活」は、保育者と幼児との語り合う純なるお嘶においてこそ、最も能く発揚される。優良なる実演を観て、幼な心に同化された印象を、地上に楽園をもたらせる至宝として鑽り下げて行きたいのである。(三二、二、一九、十一時五十分記)

大塚喜一